

当画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は今年で18回目を迎える。今回は榎本和子「無限のヴィジョン・8面体——A. デューラー“メランコリア I”」である。会期は7月1日(水)から25日(土)まで(日、月、祭休廊)。

展示作品は榎本和子のテキスト「A. デューラーの多面体の謎——無限のメランコリア」にもとづき制作された多面体(実は黄金比8面体)についての諸作品、およびアルブレヒト・デューラー(1471-1528)の作品で、次のように構成されている。

1. 立体(黄金比八面体):みかげ石(推定実寸)、クリスタル、鉄線(稜線)のスケルトン、位相空間的オブジェ、プラスチックモデル(入子構造)。
2. 平面:榎本和子:油彩、ドローイング
3. 映像:レーザー光線(クリスタル)およびコンピューターグラフィックスによる映像(モニター設置)。
4. A. デューラー:「メランコリア I」1514年、銅版(エングレービング)

詳しくは前記作品リストをご参照ください。

カタログのテキストは榎本和子、西垣通、大岡信、山口勝弘、の4氏で、それぞれの立場から文章をいただいた。また富井玲子さんには榎本和子のテキストを英訳していただいたが数学的な面でご助言をいただいた。(英文は別刷・差込み)

また、今回の展示作品は平面、立体、映像と多彩な表現となったため、田中敬一、中村茂、斎藤さだむの各氏からその専門領域でご協力をいただいた。記して深謝申し上げます。

なお、この展覧会は榎本和子のテキストも作品であると考えられるので、ぜひともこのテキスト「無限のメランコリア」をお読みいただきたい。と同時に榎本和子の今回の仕事の意味を的確に解説していただいた西垣通さんの「メランコリアの海を泳ぐ」を始め大岡信「多面体人間榎本和子」、山口勝弘「類推の魔から逃れて」、をお読みいただきたい。この展覧会への理解は一層深まると思うからです。

今回、オマージュ瀧口修造展に榎本和子を迎えた理由は何か? このことについて記して置きたい。前出の榎本和子の年譜をご覧くださいと瀧口修造のタケミヤ画廊での企画展で1953年3月および54年4月の2度、榎本和子は選ばれてい

る。それ以来瀧口修造を師と仰ぎ、画業に専念したという経緯があることが第一。

第二に榎本和子は黄金比多面体のクリスタルのレプリカを1979年に作成しそれを持って、同年3月、瀧口修造宅を訪問し、さまざまな示唆を得たことによる。この訪問記を榎本和子は、「猫のいない猫笑い」(コレクション瀧口修造第7回第7巻月報1992/3みすず書房刊)と題して記しているので申し添える。

さらに付け加えると、榎本和子はこの黄金比8面体の問題を1978年頃強く意識し、論文にまとめ、翌79年6月号「みずる」(No.891)に、「デューラーの多面体に憑かれて」と題し、寄稿しているのである。これが最初の論文でその後さらに解析を深め、今回の決定版テキストとなった。瀧口先生はこの「みずる」に目を通して後、7月1日に逝去されたのである。以上が瀧口修造と榎本和子の直接のかかわりであり、展覧会開催の理由である。

今回の展覧会は、これまで17回を数えるオマージュ瀧口修造展と異なったユニークなものとなり、私を妙に興奮させるものとなった。一言で言うとそれは「新しい発見」であった。見えなかったものが見えてきた、と言い換えてもよいと思う。

何が見えてきたか？ 第一に榎本和子のすぐれた感性的な一面とは異なる数理的理性的な別の一面である。黄金比8面体の榎本和子の解法はまことに美しく宇宙的神秘的で卓抜である。これはまさしく新発見と言うべきである。

第二に「メレンコリア I」の持つ謎に私もすっかりのめり込んでしまい、デューラーの術中にはまってしまった。この作品が1514年の発表以来、いかに多くの美術、図像学、幾何学関係者に刺激を与え続けているかが納得できるのである。「メレンコリア I」は有名な銅版であるから、私も昔から知っている。しかし、一見して多面体であることは分かっても、12面体なのか、8面体なのか、6面体なのか、分からない人が殆どである。私もそうであった。今回はこの多面体がテーマであるので、しっかりと見えたし、榎本論文によりその構造まで知ることができた。と同時に「メレンコリア I」のもつ謎と魅力が次々と見えてきて夢中になったのは久しぶりの体験である。デューラー関係資料は作品カタログ・レゾネを含め30冊余が私の手許にあり、ただいまそれらをチラリと眺めながらこの文章を書いている。私にとってはデューラーが見えてきつつある、ということであろう。

第三に、私のオマージュ瀧口修造展ではすでに美術の世界ではよく知られている作家を瀧口修造とのかかわりでとりあげてきた。つまり、瀧口修造を大地に根を張りめぐらした巨木に例えるならば、その枝に実るすばらしい果実を私はこれまで17回、選び採ってオマージュ瀧口修造展を開催してきた、と言えよう。榎本和子は見えていなかった。榎本和子を知ったのは「福島秀子展」(第12回オマージュ)

ジュ・瀧口修造展)を契機とする。その福島秀子は「実験工房と瀧口修造」(第11回展)で、私はそのしごとを知った。榎本和子という見事な果実は、巨木の葉の繁みにかくれて私には見えなかったのである。ところがオマージュ・瀧口修造展を続けてゆくうちに、幸運にも私の視界に見えてきた。見えないものが見えてきたと言う所以である。

さて、ここでA. デューラーの「メレンコリア I」1514、銅版(エングレービング)について改めてその作品を見ることとする。

まず最初に眼にとび込んでくるのは右側の有翼の婦人像である。ついでその周辺にさまざまな“もの”が置かれていることである。そしてそのエングレービングのテクニックのうまさに舌を巻く。絶品である。

堂々たる婦人の眼がすばらしい。彼女の眼はメランコリー・憂うつて何もやる気がしないという無気力な眼ではない。遠くのものを目指している眼である。すなわち、永遠なるものを想い求めている気力に溢れた眼である。しかし、それを表現することはコンパスや定規などの道具を使用して努力しても届かない。その芸術家の苦悩——それがメランコリーである。多くの学者が説くようにこの婦人像はデューラー自身の精神的自画像なのだ。デューラーは永遠なるものの表現を求めて悩んでいたのだ。

その眼の前方に石塊の多面体がある。この多面体：切頭斜方6面体は、幾何学の象徴であるとするのが大方の学者の見解である。デューラーの時代、美術と幾何学は一体であった。美しい美術品は即すぐれた幾何学の形体なのである。この切頭の位置が今回のテーマである。これは榎本和子、西垣通のテキストで明快に示されているのでくわしくは繰り返さない。しかし、黄金比8面体が球に内接し、6面体を内接し、8、6、8、6……と無限に減少、拡大し、街、国、地球、宇宙まで包んで行く入子構造は、宇宙的、神秘的で見事な解法であり、デューラーの意にもっともかなっていることは強調しておきたい。

デューラーはこの榎本和子説を知っていたかどうか？ 彼の画いたこの多面体のドローイングが残されているが、その画面の8面体の上部に眼が画かれている。これを透視図法的作図の焦点とみなせば、デューラーは透視図法説でこの8面体を描いたと推測される。しかしこの解法では8面体は球に内接しないし、入子構造にはならないのである。デューラーは榎本和子説を知っていたかもしれない。しかしこれは謎である。

デューラーが榎本和子説を知っていたとしても、知らなかったとしても、デューラ

一の意にかなった榎本和子の解法に彼は満足したであろう。私にはデューラーの笑顔が見えてくるのである。よくやってくれたという笑顔が。

次にこの8面体の表面にかすかに見えるかたちに注目したい。このかたちは何か？ 自画像、頭蓋骨、猿、その他と意見があるようで謎とされてきたが頭蓋骨とみるのが正解であると思う。

その根拠はと問われると、坂崎乙郎“「メランコリア」をめぐって”(デューラー版画展図録・西武美術館刊1980)のなかで、次のように記されているところから始まる。

……銅版画の3作品(「騎士と死と悪魔」1513、「メランコリア I」1514、「書斎の聖ヒエロニムス」1514、の3点でエングレービング、同サイズ)に共通する2つの分母、犬と砂時計には注目しなくてはならぬ。砂時計は死を、犬は忠実さを象徴している。……

とあるが、この3作品をよく見ると、「騎士と死と悪魔」と「書斎の聖ヒエロニムス」にあって、「メランコリア I」にない重要なものがひとつある。それは頭蓋骨である。従ってこの定かには見えないかたちは頭蓋骨で、デューラーはこの8面体にそれを封じ込めたともみるのが正しいのではなかろうか？ したがって共通する分母は3つということになる。

この展覧会のもうひとつの重要なポイントは、レーザー光線とコンピューター・グラフィックスによる映像の表現である。

クリスタルの黄金比8面体にレーザー光線を透射して壁面に映し出される色彩と線とかたちの映像はまことに美しい。また、コンピューター・グラフィックスにより黄金比8面体が球に内接し、6面体を内接し、入子構造で無限に減少、増大するかたちを見るのは驚きである。

これは484年前のデューラーの作品を現在の科学、技術の水準で、新たに表現したということになる。これこそ、デューラーの時代には見えなかったものがいま見えてくるという意味で「新しい発見」というべきである。デューラーがこの映像を見たら驚いて声も出ないのではなかろうか。そんなことを想像すると思わず私の方が楽しくて笑ってしまう。

この展覧会を企画して以来、私の感じていることは、閉塞状況にある美術の現状について、それをどのように明るいものにしてゆくか？ ということである。

美術は美術であればよい、美術以外の余計なものはすべて削り取って純粹なものにすることを目的とした現代美術の考え方がある。その結果、現代美術は

自縄自縛の状態に落ち込み、展望のない状況になってしまったのではなかろうか？ その先が見えないのである。

いま、求められるものは他領域すなわち文学、詩、音楽、建築、科学、数学等と美術のコラボレーションではなかろうか？ 丁度、ルネッサンスのように美術のみずみずしい力を回復した時代を想起する必要があると思う。A. デューラーが幾何学とコラボレートする方法ですぐれた美術が生まれてきたように、考え方を考える必要があるのではないか。私にはその時期が来ているように思われる。

今回の展覧会の企画を機に、「メレンコリア I」の8面体をめぐって、私はいろいろなところに出掛け、多くの人に会い、さまざまなことを知ることができた。主要なものを列記すると次のとおりである。

1. パチョーリ「神聖比例論」1509の原本を千葉県にある放送大学の図書館で見ることができたが8面体は見つからなかった。
2. 東京大学総合研究博物館での8面体さがしては12面体が見つかった。
3. アルベルト・ジャコメッティのキューヴの彫刻と8面体との関係：G. D. ユベルマンの著書1993。
4. アンゼルス・キーファーの「メランコリア」のインスタレーションには飛行機の翼になんと8面体に乗っている（「メランコリア——知の翼——」アンゼルス・キーファー展・1993・セゾン美術館）。
5. 鉱物結晶学の視点からのアプローチ：平行6面体の結晶をもつピンクの方解石を求める。
6. A. デューラーの作品レゾネ、画集等の集収。
7. 多面体の幾何学的視点からの書籍、資料の探索。
8. レーザー光線およびコンピューターグラフィックスの映像テスト。その他。

このような旅の過程で、お名前は記さないが、ご教示、ご協力、ご配慮いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

私のデューラー「メレンコリア I」謎の多面体探究の旅はこの展覧会で一応の区ぎりを迎えることになったが、実は探究の始まりという気持ちである。扉をあけてデューラー「メレンコリア I」の世界を眺めて驚いているというのがただいまの私の心境である。全く、美術の世界は広く、深いのを改めて感ずることができたのは幸せだと思う。

ところで、当画廊は1978年3月、京橋で開廊以来、今年でまる20年を迎える。第一回の企画展は同年9月「マックス・エルンストとイヴ・タンギー版画2人展」で

あった。この展覧会のお祝いに瀧口修造先生からMAXとYVESを頭に折り込んだ詩(自筆)をいただき狂喜したのを、ただいまもなつかしく思い出す。

爾来20年、長いと言えは長いが短いと思えば短い時の流れの中で、今回の展覧会を含め開催した企画展は185回、カタログは116冊を数える。この20周年を記念する企画展としては第18回オマージュ瀧口修造：榎本和子展が名実ともにもっともふさわしいと私は思っている。ひとこと申し添える次第である。

最後に、久し振りに楽しい興奮を私に与えて下さった榎本和子さんに感謝申し上げます。さらなる今後のご健闘をお祈りし、結びの言葉といたします。

1998年6月1日